

Mark Twain の *Pudd'nhead Wilson* の主題

那 須 頼 雅

I

Mark Twain の *Pudd'nhead Wilson* は実に多くの問題を含んでいる。Mark Twain 研究と言えば *Huckleberry Finn* 一作の研究に限ってしまう批評界の傾向が見られるなかで、*Pudd'nhead Wilson* だけはかなり多くの批評家によって、しばしば取り上げられている。なかには、この作品の価値を非常に高く評価する批評家もある。たとえば、Leslie Fiedler は、“*Pudd'nhead Wilson* is a fantastically good book…….”¹ だと述べているし、また F. R. Leavis は最近改刊になったこの書に序文を付して、*Pudd'nhead Wilson* は “the masterly work of a great writer” だと紹介した後、“a classic in its own right” とまで激賞する。² こういった過

-
- 1 L. Fiedler, “As Free as Any Cretur……,” *New Republic*, CXXXIII, Aug. 15, 1955, p. 17.
 - 2 Mark Twain, *Pudd'nhead Wilson*, with an Introduction by F. R. Leavis, London, 1964, p. 9.

大な評価をそのままに受けとっていいかどうかは、たしかに問題として残るであろう。ただ、ここで私がこの作品を取りあげようとしているのは主として次の理由によっている。Mark Twain へのアプローチに欠かすことのできないのは、ミシシッピー河という大自然の要素であろうが、*Pudd'nhead Wilson* は *Tom Sawyer*, *Huckleberry Finn* と並んで、“Mark Twain's Mississippi trilogy” を成すからである。さらにいま一つの理由は、この作品を書き終えた当時58才という、作家として最も円熟したと思われる Mark Twain が、“*Pudd'nhead Wilson* is a success! Even Mrs. Clemens, the most difficult of critics, confesses it, and without reserves or qualifications.”³ と満足 of 意を表わしていることである。

Mark Twain がこの作品に激しい情熱を燃やして取り組み、苦心の末に完成にこぎつけたというだけあって、たしかにこれは問題作でありこの中に彼の特性が遺憾なく盛り込まれていることは疑いのないところである。

Pudd'nhead Wilson の創作の詳しい事情を知る重要な手掛りを我々に与えるのは、*Pudd'nhead Wilson* から抽出されて出来たといわれる *Those Extraordinary Twins* の序文である。この序文の中で、Mark Twain は *Pudd'nhead Wilson* の成り立ちの詳細をユーモラスに記録している。

Originally the story was called “Those Extraordinary Twins.”

I meant to make it very short. I had seen a picture of a youthful Italian “freak”—or “freaks”—which was—or which were—on exhibition in our cities—a combination consisting of two heads and four arms joined to a single body and a single pair of legs—and I thought I would write an extravagantly fantastic little story with this freak of nature for hero—or

3 A.B.Paine, *A Biography*, I, pp. 590-591.

heroes—a silly young miss for heroine, and two old ladies and two boys for the minor parts. I lavishly elaborated these people and their doings, of course. But the tale kept spreading along, and spreading along, and other people got to intruding themselves and taking up more and more room with their talk and their affairs. Among them came a stranger named Pudd'nhead Wilson, and a woman named Roxana ; and presently the doings of these two pushed up into prominence a young fellow named Tom Driscoll, whose proper place was away in the obscure background. Before the book was half finished those three were taking things almost entirely into their own hands and working the whole tale as a private venture of their own—a tale which they had nothing at all to do with, by rights.⁴

この引用文の中で、我々が先ず注目しなければならないことは、ほとんど物語が Mark Twain の無意識の世界で展開している点と、Mark Twain は元々 *Pudd'nhead Wilson* を中心にして書く意図は全然なくて、*Extraordinary Twins* を主人公にして書くつもりだったという点とである。この *Twins* は一つの胴体に二本の脚という普通の下半身に、二つ頭と四本の腕がつくという代物である。元々、この“freak”について物語を書くつもりが、本来目立たないわき筋に控えている筈の似非 Tom の物語に変わったように説明されているが、実はこの分別不可能な“freak”，あるいは“freaks”こそ、この Tom という二重人格を導入するための伏線であることが後で明らかにされる。この言わば“semiconscious method of narration”による混乱と転換を見きわめることが、この作品の解釈を左右する

4 Mark Twain, *The Writings of Mark Twain* (“Hillcrest Edition”), New York & London, 1906, Vol. XIV, pp. 230-231.

重大な鍵である。私の結論から先に言えば、社会環境の硬化した鋳型の中における identity の歪曲と喪失が *Pudd'nhead Wilson* の主題である。この主題を支える最も重要なものとして、この小説にとりわけ鮮かな形式 (form) と内容 (content) との一致が見られる。

II

Mark Twain ほど、人と作品とが、実に微妙に繋がり合っている作家は珍しい。彼の師であり終生の友であった William D. Howells が、この Mark Twain の特質を次のように伝えた。

He (Mark Twain) was a most consummate actor…… that he was the first to know the thoughts and invent the fancies to which his voice and action gave the color of life. Representation is the art of other actors; his art was creative as well as representative; it was nothing at second hand.⁵

彼の最も良き理解者であった Howells が彼を “a most consummate actor” だと評した真意は、Mark Twain の筆になる「文字」についてというより、むしろ、彼の「声」と「行動」に関するもので、それが聞く人の心の中に浸透して感動を喚び起すことのできる story-teller の Mark Twain を彼は念頭においている。Mark Twain は novelist であるよりも先ず story-teller であった。よく引き合いにだされる彼の “How to Tell a Story” の中で、humorous story はアメリカ独自なものであると述べたあと、humorous story の効果を左右するのは “manner of telling” だと言っている。そして、さらに実際的な一面に触れて、

5 Mark Twain, *Mark Twain's Speeches*, New York & London, 1910, i (Introduction).

The humorous story is told gravely; the teller does his best to conceal the fact that he even dimly suspects that there is anything funny about it.⁶

と説明する。これは要するに、語り手はたえずその物語から「へだたり」を置くように心掛けるべきだということである。この「へだたり」が完全に保たれる時に、始めて“A tale tells itself.”という物語の自然な展開が起るといふ彼の想定にはかならない。この“manner of telling”が、小説 *Pudd'nhead Wilson* の中に巧みに生かされて、この小説の意義を高める上に大きく役立っている。

Mark Twain は先ず主人公と物語の間に「へだたり」を設け、両者の間を「無意識」の糸で繋ごうとする。そして、この両者の選択にあたっては可能な限り相対立する度合の高いものを選んで組み合わせ、自然にそれらの均衡が破れて事件を連鎖的に起すという手法を用いている。*Pudd'nhead Wilson* では、閉塞された世界と、そこへ訪れる stranger という設定で物語が始っている。*Pudd'nhead Wilson* の世界は、Dawson's Landing という小さな町で、時間的、空間的、精神的に完全に閉塞された世界として写し出される。三方が山々に囲まれ、残る一方には雄大な自然の流れミシシッピー河をひかえ、ほとんど外界から隔絶した奴隷制社会である。ここでは、働く者と働かざる者、異端として却けられる者と、正統として尊ばれるもの、黒人と白人といった差別が敢然として存在していて、しかも、“sleepy and comfortable and contented”といった雰囲気を残して五十年の歴史を経た町である。この Dawson's Landing の性格を象徴的に描きだしている条りとして次の箇所があげられる。

When there was room on the ledge outside of the pots and boxes for a cat, the cat was there—in sunny weather—stretch-

6 Mark Twain, *The Writings of Mark Twain*, Vol. XXII, p. 8.

ed at full length, asleep and blissful, with her furry belly to the sun and a paw curved over her nose. Then that house was complete, and its contentment and peace were made manifest to the world by this symbol, whose testimony is infallible. A home without a cat—and a well-fed, well-petted, and properly revered cat—may be a perfect home, perhaps, but how can it prove title?⁷

この「長々と体をのぼし、心地よさそうに眠っている」猫は、平穩無事の表面の下に隠された復讐、反抗を予期せず奴隷制社会の因襲の中にまどろむ Dawson's Landing の白人の連中を象徴的に表わすものである。この太平の夢をむさぼる dreamers には、ものを正しく見究め判断する能力が完全に失なわれ、白と白として、黒と黒として見分ける力さえ彼等には欠ける。この分別と感性を完全に喪失した Dawson's Landing による犠牲者が Pudd'nhead Wilson である。こういう社会であれば、そこを訪れる者が誰であれ、仲間として受け容れられないであろうが、Wilson は特にそこで疎外される素質を備えている。それは警句を口にし指紋を蒐集する彼の奇癖である。Wilson はこの町へ来て間もない頃、姿を見せず盛んに吠えたてる犬に気分を害して、“I wish I owned half of that dog.”と口ぼしるが、この警句の意味が汲みとれない町の連中は、Wilson を fool であると断定して、“Pudd'nhead” という侮蔑の呼び名をつけて彼を呼ぶようになる。この夢にまどろむ「猫の社会」の静寂を破る「犬」とは、奴隷女 Roxana の実子で白人との混血児、似非 Tom を象徴的に表わし、その「うなり、ほえ立て、遠ばえした」という啼き声は、「白人なる猫」にいがみかかる殺気を帯びた憎悪の声にはかならない。

このような観方をすれば、*Pudd'nhead Wilson* の第一章に予め提示さ

7 Mark Twain, *The Writings of Mark Twain*, Vol. XIV, pp. 12-3.

れる配置図は、stranger である上に侮蔑のレッテル “Pudd'nhead” の呼称が与えられ Dawson's Landing から離れた別世界、いわば Huck の「Jackson 島」とでも言える場所に身を置いた偵察者 Wilson と、「狂犬 Tom」を内に秘めて不気味に静まりかえっている「猫の集団」ということになろう。この「狂犬 Tom」が「眠れる猫」に及ぼす脅威は物凄いもので、Wilson の別世界にまでその影響が及んでくるほどである。Wilson は距離をへだてて、“(The story) goes along telling itself.” のさまに見とれている傍観者にしかすぎない。Wilson は Mark Twain 自身言っているように、この小説の中に心ならずも侵入することが許された stranger である。当然にして Wilson にはヒーロー的性格が薄い。21章の中で、Wilson が登場するのは9章のみに限られ、しかも真に登場人物らしく振舞うのは最後の法廷の場面だけにすぎない。その法廷のクライマックスにしても、Wilson の理論と実証に基づいた水も洩らさぬ演説がいかにもうつろなひびきをもっていることを見落してはならない。車輪の空まわりのように、何の摩擦も反応もなく、一方的に流れ出るだけといった感じをうける。この感じこそ、作者 Mark Twain が意識的にねらった効果にほかならない。

III

今までは主として形式、手法の面から、主人公 Wilson と Tom's Story との間の「へだたり」(isolation) について触れたが、ここでその問題を内容の面からみてみよう。

この「へだたり」というのは、たしかに Wilson の意志で作られたものではない。Wilson はスコットランド系のアメリカ人であるが、大学を出てからはるばるこの地に乗りこんできた目的は “to seek his fortune” であることから明らかである。ただこの「へだたり」の要因が Wilson の

無意識、彼生来の気質に基づくものであることを見落してはならない。先ず Wilson がこの町に到着した当日に口にしてしまった “fatal remark” というのも、Wilson の無意識な発言であったことは次の描写で明らかである。

The group searched his face with curiosity, with anxiety even, but found no light there, no expression that they could read. They fell away from him as from something uncanny, and went into privacy to discuss him.⁸

この発言が、Mark Twain のいわゆる「連結かん」(link)であり、Wilson と Dawson's Landing との最初の接点ということになる。そして、第二の接点と看なされるのが、Wilson と奴隷女 Roxana との出合いである。Wilson がたまたま自分の家の近くに乳母車を押してやってきた Roxana が仲間の奴隷と立ちばなしをしているのを聞きつけ、出かけていって話しかける。その時、彼はその乳母車に向い合わせて乗せられた二人の赤ん坊を見て、よく似ているので、ただなんとなく次のように言う。

“How do you tell them apart, Roxy, when they haven't any clothes on?”⁹

Roxana はこの質問に大笑いしながら次の如く答えている。

“Oh, I kin tell 'em 'part, Misto Wilson, but I bet Marse Percy couldn't, not to save his life.”¹⁰

このなんでもない会話の一駒が、Percy Driscoll の嫡子 Tom と黒人召使 Roxana の私生児 Chambre とが取り替えられる事件の重大なきっ

8 *Ibid.*, p. 16.

9 *Ibid.*, p. 24.

10 *Ibid.*, p. 24.

かけとなる。この後、Roxana は Percy 家で起きた盗難事件に巻き添えにされ、主人から「川下へ売りとばす」という恐ろしい脅迫に怯え、親子もろとも死を決意した矢先に、彼女が思いだしたのが、この Wilson の言葉である。Wilson にすら二人の見わけがつかないのに、ほかの誰れにもつく筈がないことに気づいて、彼女はまるで夢遊病者のように、わが子 *Chambre* と若主人 Tom とを転換させるのである。こう考えてくると、この story の発端を作ったのは、Roxana であると同時に、間接的ではあるにしても Wilson だということになる。しかし、ともかく、この第二の接点でも、Wilson とこの story との “link” は Wilson の無意識の世界での出来事であることに相違はない。後になって起る York Driscoll 殺人事件の真犯人割り出しに Wilson はこの秘密がわからないばかりに散々に苦勞をなめるからである。

第三の接点は、果して接点と言えるかどうかというものである。これはそれまで相手にされなかった孤独な Wilson に始めて与えられる友人、イタリア人の双子の兄弟との出会いである。言うなれば、*Dawson's Landing* の町にとっては、互いに stranger 同志であるからである。その上、この友情を完全なものにしたのは、*Dawson's Landing* が Wilson を締めだした原因そのもの、つまり Wilson の警句なのだ。Wilson が自分の警句を一つ二つ読んで双子の兄弟に聞かせると、兄弟は心からそれを賞讃する。この兄弟が Wilson の心をとらえた理由を、第11章の冒頭にある *Pudd'nhead Wilson's Calendar* が的確に説明する。

There are three infallible ways of pleasing an author, and the three form a rising scale of compliment: 1, to tell him you have read one of his books; 2, to tell him you have read all of his books; 3, to ask him to ask him to let you read the manuscript of his forthcoming book. No. 1 admits you to his

respect; No. 2 admits you to his admiration; No. 3 carries
you clear into his heart.¹¹

この友情の絆で結ばれていたからこそ、Wilson は stranger の身にしては実に華々しい活躍を前後の法廷の場面で見せるのである。同じ Free-thinkers' society の一員である York Driscoll の弔いの意味での復讐というよりはむしろ、この双子の兄弟が無実の罪で縛り首になるということが Wilson の心を強く動かすからである。

Wilson regarded the case of the twins as desperate—in fact, about hopeless. For he argued that if a confederate was not found, an enlightened Missouri jury would hang them, sure; if a confederate was found, that would not improve the matter, but simply furnish one more person for the sheriff to hang. Nothing could save the twins but the discovery of a person who did the murder on his sole personal account—an undertaking which had all the aspect of the impossible.¹²

こうして迎える第四にして最後の接点で、Tom とのものになる。順序として、これは最後にまわっただけで、この小説全体にかぶさっている重要なものである。何故ならば、第1章において盛んに吠えたてて Wilson の気分を害する犬は似非 Tom を象徴的に表わすことは先に述べた通りである。犬には姿を隠して吠えたてる面と人に撫でられ尻尾を振る面とがみられるように、この Tom には全く相反する両面が存在する。つまり、奴隷制保有社会 Dawson's Landing に反逆する面とそれに迎合する面という両面である。更に言い替えるならば、これは、賭博、詐偽、窃盗とあらゆる悪業の限りをつくし、果ては実母 Roxana を川下へ売りとばし、養父

11 *Ibid.*, p. 96.

12 *Ibid.*, p. 192.

York Driscoll を殺害してその罪を双子の兄弟に被せるという demon 的性格と、他の半面は、Dawson's Landing きての名門の世嗣ぎとして、さわりの柔らかな愛想のよい人柄で、養父が殺害されると逸早く旅行先から弔電を打ち、ひきかえしてからも悲しげに心を痛める gentleman 的性格である。この Tom の二重人格は Roxana に依ると、Tom の中に流れる黒人と白人の二重血統に起因するという。双子に足蹴にされて激怒した York Driscoll が、Tom に決斗を申し込むようすすめるが、これを拒んで尻込んでしまう Tom を前にして言う Roxana の軽蔑をこめた言葉に、このことがよく表わされている。

“En you refuse' to fight a man dat kicked you, 'stid o' jumpin' at de chance! En you ain't got no mo' feelin' den to come en tell me, dat fetched sich a po' low-down ornery rabbit into de worl'! Pah! it makes me sick! It's de nigger in you, dat's what it is. Thirty-one parts o' you is white, en on'y one part nigger, en dat po' little one part is yo' soul. Tain't wuth savin'; tain't wuth totin' out on a shovel en throwin' in de gutter. You has disgraced yo' birth. What would yo' pa think o' you?¹³……”

さて、この Tom にみられる demon 的性格と gentleman 的性格とはこの Tom を生み育てた Dawson's Landing の正確な反映として描かれる。Dawson's Landing に深く根ざして非人間化の作用をもつ honor と money の偏重主義が、そのまま Tom の gentleman と demon の両面として現われている。とすれば先に示した Tom を象徴する「吠えたてる犬」と、Dawson's Landing の白人を象徴する「眠れる猫」とは、*Those Extraordinary Twins* の“freak”と同じで、同じ本体を抛り所とする両極

端であることが判明する。こういう奇怪極まる Dawson's Landing という“freaks”の投げかける ridicule の餌食になるのが Pudd'nhead Wilson ということになる。この ridicule の毒気に一度あてられると、なかなか回復するものではなく、Pudd'nhead Wilson の場合、20年を要している。このことは、この小説の冒頭にかかげられる *Pudd'nhead Wilson's Calendar* によく示されている。

There is no character, howsoever good and fine, but it can be destroyed by ridicule, howsoever poor and witless. Observe the ass, for instance : his character is about perfect, he is the choicest spirit among all the humbler animals, yet see what ridicule has brought him to. Instead of feeling complimented when we are called an ass, we are left in doubt.¹⁴

Tom は Wilson に ridicule の矢を浴せる目的で登場していると思われるほど、Wilson に対する ridicule は痛烈でもあり、執拗に行なわれる。唯一の友人である双子の兄弟の前でも Wilson は彼に大変な ridicule を投げかけられ辱められる。いかにも憎々しげな Tom の ridicule が次の引用によく表わされている。

“But look here, Dave, …… you used to tell people's fortunes, too, when you took their finger-marks. Dave's just an all-round genius—a genius of the first water, gentlemen ; a great scientist running to seed here in this village, a prophet with the kind of honor that prophets generally get at home—for here they don't give shucks for his scientifics, and they call his skull a notion factory—hey, Dave, ain't it so? But never mind ; he'll make

14 *Ibid.*, vii (*Introduction*).

his mark some day—finger-mark, you know, he-he !……”¹⁵

このうるさい悪意に満ちた侮蔑の言葉の中に、Tom は自分自身に殺人犯人の烙印を押すことになる Wilson の “mark”, “finger-mark” とは露知らぬ愚かさが見事に描かれている。この種の自業自得の例はいくつかあげられるが、最も重要なものは殺人事件の謎が解けず両手で頭を抱え込んだ Wilson の家に Tom が立ち寄って笑いながら投げかける *ridicule* であろう。

“Hello, we’ve gone back to the amusements of our days of neglect and obscurity for consolation, have we?” and he took up one of the glass strips and held it against the light to inspect it. “Come, cheer up, old man; there’s no use in losing your grip and going back to this child’s-play merely because this big sunspot is drifting across your shiny new disk. It’ll pass, and you’ll be all right again,”…………… “Did you think you could win always?”¹⁶

攻撃している筈の Tom が実はその武器 *ridicule* はもろ刃の劔であり、自分も傷ついているという痛烈な皮肉が、この引用にはこめられている。無意識が仇になっての転換と言える。こうして David Wilson が同じ無意識による転換で “Pudd’nhead” のレットルをはられたように、Tom は心なくふと洩らしたことが祟りとなって、養父殺しの烙印を押されるのだ。このように考えてくると、Wilson の指紋による功績が色あせ、空しいものに見えてくる。Wilson の指紋一辺倒という弱点を見事に突いて最後まで彼を翻弄する Tom の面目は躍如としているのにひき較べ、Wilson の成功は蔭に隠れ小さいものになってしまっている。この事は、誰れよりも

15 *Ibid.* pp. 99-100.

16 *Ibid.* p. 202.

Wilson 自身が気づき正しく理解していることを次の *Calendar* が示している。

October 12, the Discovery. It was wonderful to find America,
but it would have been more wonderful to miss it.¹⁷

こうみえてくと、この小説は、指紋研究家 Wilson の殺人犯割り出しの ‘success story’ というようなものでないことが明らかである。この主題となっているのは、Dawson’s Landing なる奴隷社会のもつ悪に関わるものにほかならない。すなわち、これは、Wilson と Tom のいずれも Dawson’s Landing の犠牲者であり、そこでそれぞれの identity を歪曲され憂き目にあわされるという悲劇なのだ。Wilson が明らかにしたのは殺人事件の犯人の白黒だけにしかすぎない。殺人犯人を終身刑、縛り首にできず川下へ売りとばす処置しかとれない奴隷社会 Dawson’s Landing のもつ矛盾は裁かれずに温存される。これこそ Wilson の悲劇であり、同時に、この奴隷社会に挑戦する Tom の悲劇でもある。

IV

以上で、Mark Twain が形式と内容の両面で、主人公 Wilson と Tom’s Stosy の間に「へだたり」を設定していることが明らかになったが、これが実に微妙な意味合いを暗示する。先に、この小説は、無意識な心が起因して始まり、自然な展開を経て、また無意識な心が動いて結着したことを説明した。これは無意識と無意識の間にはさまれた世界、Wilson の意識、思考を最小限に抑えた、いわば意識の空白状態の世界である。ここでは何もかも転換し、混乱した状況を呈する。Mark Twain は “How to Tell a Story” の中で、“funny” であるものを故意に “grave” なものに置き

17 *Ibid.*, p. 223.

替えて、結局 “funny” なものだという効果を生み出したと言うが、この小説でも同じ手法を生かして、“tragic” なものを故意に “farce” に置き替えてはいるものの、結局の処は “tragic” な効果が大きく高められている。この基本的な転換を柱にして、いろいろな転換倒錯が生じる。そのなかで特に重要なものは、もちろん Wilson の転換と復帰である。二十年の間格付けされてきた “Pudd'nhead” のしるしが、最後に拭い去られるという明るい結末は、Wilson の意識の空白状態から生まれている。一見輝かしい彼の成功物語は実は単なる夢物語にすぎない。この人間の力の空しさ、それにひきかえて、環境の力、運命の力の大きさ、これがこの作品を貫く伏線となっているところにこの作品の価値と欠陥がある。